

国立国語研究所学術情報リポジトリ

A study of the acquisition of the adverb “kitto” :
A reflection upon the prototype usage of Chinese
learners of Japanese

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 王, 冲, WANG, Chong メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001870

報告

副詞「きっと」の習得に関する研究

— 中国人日本語学習者における典型的用法から考える —

A study of the acquisition of the adverb “kitto”

— A reflection upon the prototype usage of Chinese learners of Japanese —

王 冲

WANG, Chong

要旨

本稿では、「きっと」に関して中国人日本語学習者はどのような用法を典型的用法としているかに注目し、その要因を探った。調査の結果、中国人日本語学習者は「きっと」を適用する意味的境界に関する知識が不十分であり、その上、典型的用法に関して母語話者と異なった理解を形成しており、さらに、典型的用法に関する理解形成には母語の転移があることが推察された。このことは「きっと」の指導において、典型的用法を提示する上で、類義語との意味関連及び、その意味的境界または中国語との比較に目を向けた指導が必要であることを示唆する。

キーワード：典型的用法 使い分け 母語の転移 意味構造 指導

1. はじめに

副詞習得の難しさは、これまでも多くの先行研究で「日常会話ではさほど不自由しない中上級学習者でも、副詞があまり習得されていない」と指摘されてきた（大関，1993；北條，1982 など）。例えば、「きっと」に関して、市川（2000）によれば、学習者は以下のような誤用をするという（括弧内のものは市川（2000）による訂正である）。

①あしたきっと（→必ず）来ますので、この本をここにおいてΦ（→おいて）ください。

②来なくて（→来ないのなら）、きっと（→必ず）先生に話してください。

「きっと」は学習の初級段階で学習される項目である。しかし、その反面、多義語として様々な文脈に用いられ、意味的に関連した類義語との使い分けが困難になることがあり、また学習者の母語における相当語との間に意味のズレがあることなども考えられ、十全な習得は難しいと推測される。今までの日本語教育において、副詞の指導が困難であることは多くの先行研究によって指摘されている（大関，1993；小林，1992 など）。そこで、本稿では、有効な副詞指導に向けた基礎研究として、「きっと」にテーマを絞り、中国人日本語学習者がその用法をどう理解しているかを探っていきたい。

2. 先行研究と研究課題

先行研究によれば、「きっと」には以下のような「推量」「意志」「依頼」「確率」という四つの用法があるとされている（工藤，1982；石神，1987；兪，1999 など）。

推量用法：明日きっと雨が降るでしょう。

意志用法：後で暇があったら、髪を洗いに行きますわ。晩くなるかもしれないけれど、きっと行くわ。（川端康成『雪国』）

依頼用法：私のここにいる間は、一年に一度、きっといらっしやいね。（川端康成『雪国』）

確率用法：悪いことをしていると、きっとその報いはこの世で受け取るのですからね。（丹羽文雄『南国抄』）

「確率」用法については工藤（1982）、森本（1994）に「現在の日本語では書き言葉に限定されている」という指摘があり、小林（1992）も「きっと」の「確率」の用法は廃れつつある意味であると指摘しているため、本稿では分析対象としない¹。

「きっと」の各用法に関する研究としては、王（2005）で、認知言語学でのプロトタイプ（典型的用法）、スキーマ、拡張などの概念を用いて、「きっと」の意味を構造的に捉えることでその特徴を指摘した。この研究では、日本語母語話者の「きっと」の各用法における「使用頻度の高さ」と「最初に想起される」という二つの観点から分析を行ったところ、どちらの場合にも「推量」の用法が85%を超える極めて高い頻度を示すことがわかった。

一方、「きっと」を扱った学習者の習得研究はほとんどない。しかし、「きっと」は様々な文脈に用いられ、意味的に関連した類義語との使い分けが難しく、十全な習得が難しいと予測される。そのため、学習者の「きっと」の習得過程を明らかにする必要があると思われる。そこで、本稿では中国人日本語学習者の「きっと」の典型的用法に関する理解の形成の分析を試み、以下の三つを調査課題とする。

- ①中国人日本語学習者は「きっと」のどのような用法を典型的用法としているか
- ②中国人日本語学習者は「きっと」とその「類義語」の使い分けができるか
- ③中国人日本語学習者における「きっと」の典型的用法に関する理解形成には母語の転移があるか

3. 調査1：中国人日本語学習者は「きっと」のどのような用法を典型的用法としているか

3.1 調査目的

調査1では、中国人日本語学習者（以下、学習者と省略する）の「きっと」の典型的用法は日本語母語話者（以下、母語話者と省略する）の「きっと」の典型的用法と相違があるかを見る。

3. 2 調査対象

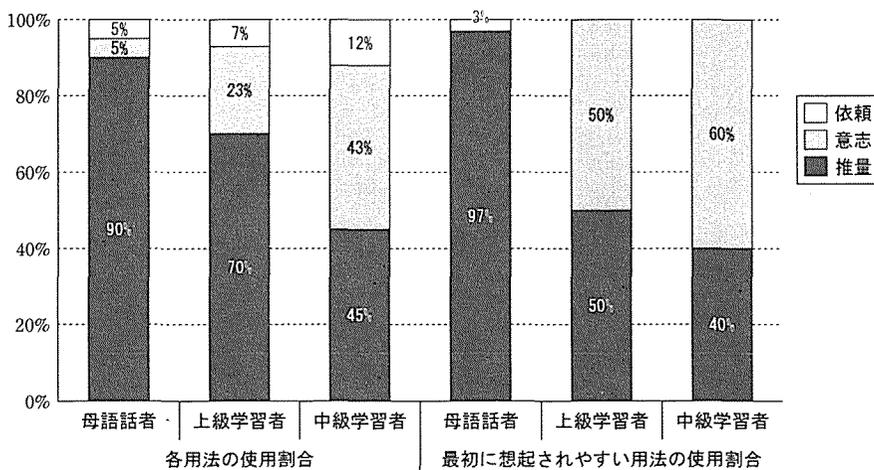
調査対象は母語話者 30 名と学習者 60 名である。母語話者は北海道から九州までの出身で 20 代から 60 代の男女である。学習者は中国の各地の出身で、天津の大学で日本語を専攻している 2 年生、3 年生の 19 歳から 21 歳の男女である。そのうち、上級者は 30 名（3 年生）、中級者は 30 名（2 年生）である。

3. 3 調査方法

調査 1 は日本語母語話者と中国人学習者の「きっと」の典型的用法を見ようとするものである。本稿では自由産出法を使用する。菅谷（2004）によれば、「自由産出法は、あるカテゴリーに属する例を産出させる方法である。プロトタイプ性は、産出の速さと頻度によって測定される。より先に想起された例、より多くの人が挙げた例ほどプロトタイプ性が高いということになる」という。そこで、調査協力者に「きっと」について「すぐに思いつく例文を 10 個書いてください。」と指示を与えて、調査を行った。そして、調査協力者によって産出された「きっと」の 900 個の例文を王（2005）で定義した「推量」「意志」「依頼」用法²に基づいて分類し、「きっと」の各用法の出現率をパーセンテージで表した。さらに、母語話者、学習者にとって「きっと」において、どの用法が最初に想起されやすいかを知るため、10 個の「きっと」のうち最初に書かれた一つについて、どの用法かを調べた。

3. 4 結果

図 1 のグラフは母語話者、学習者の「きっと」の各用法の使用割合と「きっと」について最初に書かれた用法の使用割合を示すものである。



【図 1：「きっと」の文の産出の結果】

図1のように、母語話者と上級学習者、中級学習者それぞれにおける「きっと」の各用法の使用割合と最初に書かれた用法の使用割合の傾向はほぼ一致し、母語話者と学習者とは「きっと」の各用法の使用割合が異なっていることがわかる。母語話者は、「きっと」に対して「推量」用法を90%使用し、最初に想起される用法にも「推量」用法が97%を占めており、母語話者の「きっと」に対する典型的用法は「推量」用法であることを示唆している(王(2005)の結果と一致)。それに対して、学習者は「推量」用法を最初に想起する人と「意志」用法を最初に想起する人に分かれ、典型的用法は一定していない。上級者では、「推量」用法を最初に想起する人(15人)と「意志」用法を最初に想起する人(15人)の数は同じである。また、学習者は上級に進むにつれ、母語話者の各用法の使用割合に近づいていくように見えるが、依然として母語話者より「意志」用法を多く使用している。特に、中級者では、「意志」「依頼」用法を合わせて55%使用しており、最初に想起する用法では「意志」用法が60%と過半数を占めている。

3.5 考察

以上の結果を踏まえ、なぜ学習者には「意志」用法が多く使用されるか、なぜ多くの者に「意志」用法が典型的用法として使用されているかを考えてみたい。典型的用法に関する理解形成はその用法を見聞きする頻度に影響されるものと考えられる。中国の大学で日本語を専攻している学習者の場合、普段の学習では教科書や辞典の記述を読み、教師の指導を受けているため、これらの影響があるかどうかを分析する必要があると考えられる。そこで、学習者が使用している『新編日語』の教科書と『新日漢辞典』の記述について見ていきたい。これを以下の表1に示す。

【表1：教科書・辞典における「きっと」の説明】

教材名	副詞	説明	例文
新編日語	きっと	一定	元旦は大変な人出で、バスが～混むでしょう。
新日漢辞典	きっと	一定 必然 确实	彼は～来る。／他一定来。 ～お元気だよ。／一定很健康。 ～行くよ。／一定去。 ～知らせてください。／一定要通知我。 あそこに行くと～彼に会える。／到那一定能见到他。

『新編日語』は中国語母語話者を対象にした教材であるため、説明は中国語でなされている。「きっと」は第1冊第12課(p.212)で初めて導入され、「元旦は大変な人出で、バスがきっと混むでしょう。」という「推量」用法を表す文が挙げられている。このように、教科書では「きっと」の「推量」用法が提示されているにもかかわらず、学習者は「意志」用法を多く使用している。このため、教科書の導入方法は学習者の「きっと」の典型的用法に関する理解形成に対する決定的な要因とはならないと思える。しかし、教科書の単語

表に書かれている「きっと」を見ると、中国語の「一定」という訳語が与えられている。中国語の「一定」には以下のような「推量」用法、「意志」用法、「依頼」用法がある（王（2004）参照）。

推量用法：我们的目的一定能够达到。（私たちの目的はきっと達成できる。）

意志用法：我一定去。（私は必ず行きます。）

依頼用法：明天下午5点你一定得来。（明日午後5時に必ず来てください。）

王（2004）では中国語母語話者は「一定」の「意志」（意志、依頼）³用法を多く使用しており、より典型的な用法であると指摘した。学習者の単語の知識が足りない段階では、日本語に対する語感もそれほど発達していないため、日本語を学習する際、母語の翻訳で学習する癖があると予想できる。したがって、学習者は「きっと」＝「一定」と捉えてしまい、「きっと」を使用する際、無意識のうちに中国語の「一定」を思い浮かべてしまうと考えられる。第1言語で典型性が高いものは、第2言語に転移しやすいと考えられるため、学習者は「きっと」を使用する際、中国語の「一定」を考えて、「意志」用法を過剰に使用していると考えられる。このように、教科書の説明が学習者の「きっと」の典型的な用法に関する理解を形成する遠因になっている可能性がある。

次に、学習者がよく使用している『新日漢辞典』（p.478）を調べると、「きっと」の訳には「一定」が含まれている。例文には、「きっと行くよ」「きっと知らせてください」のような話し手の「意志」を表す文が挙げられ、しかも、すべて「一定」で訳されていることがわかる。王（2005）では、「きっと」の「意志」「依頼」用法は話し手の「願望」「期待」を表すとした。したがって、「明日とても大事な会議がありますので、～行くよ」と「休みのスケジュールを～先生にしらせてください」のような「責任」「義務」を表す文脈であれば、「きっと」を用いることはできない。しかし、辞書に書いてあるような例文だけに頼る学習者は、「きっと」が使われる文脈を読み取ることができないため、「きっと」＝「一定」という誤解が生じていくと考えられる。このように、学習者の「きっと」の典型的な用法に関する理解形成に辞典の記述が影響していることも十分に考えられる。ところで『新明解辞典第6版』（p.344）を調べてみると、「きっと」に対する記述は「物事が見込み（期待）通りに行われると確信をいだく様子。『～お元気だよ』『どんな事があっても～行くよ』『～知らせてください』」となっており、例文は『新日漢辞典』と大差はない。この点から、「きっと」の典型的な用法に関する理解の形成には、一般に母語話者の場合は日常の経験などが優先されているのに対し、学習者の場合は母語の概念などが持ち込まれていると推測される。

産出データの誤用文を見ると、中級学習者では、「私はきっと通訳者になりたいです」「もうすぐ期中（→中間）テストが来るから、きっと復習をしなさい」のような「意志」「依頼」用法の誤用が多く見られる。上級者であっても、この種の誤用が見られる。例えば、「私はきっと勉強しなければならない」「私はきっとヨーロッパへ旅行するつもりだ」「テストの時、問題の内容にきっと気をつけてください」などである。これらの誤用文を中国

語に訳した場合、それぞれ「我一定想当翻译」「马上期中考试了，你一定要复习」「我一定要学习」「我打算一定要去欧洲」「考试时一定要注意题问内容」のようになり、すべて「一定」を用いることができる。これらからも、学習者の「きっと」の理解には母語の影響があることがうかがわれる。この点については5章で詳しく考察する。

以上のことから調査1の結果には母語である中国語、教科書や辞典の記述の影響があると推測される。学習者の産出データでは母語話者より「意志」「依頼」用法が多く使用されており、誤用も多く見られる。このことから学習者の「意志」「依頼」用法の使用範囲は母語話者より広く、これらの用法に関して学習者の意味に対する理解が十分ではないことが予想できる。また、学習者の「きっと」の「意志」「依頼」用法の誤用文はほとんどの場合「必ず」とすると正しくなる。そこで次節では、「きっと」の「意志」「依頼」の用法に関連して類義語との使い分けができるのかを見ることにする。

4. 調査2：中国人日本語学習者は「きっと」とその「類義語」の使い分けができるか

4.1 調査目的

調査2では、母語話者と学習者の意味の理解にズレがあると推測された「きっと」の「意志」「依頼」用法に着目し、学習者に「きっと」とその類義語「必ず」との使い分けができるかどうかを調べる。

4.2 調査対象

母語話者は調査1のうちの15名であり、北海道から九州までの出身で20代から60代の男女である。学習者は調査1と同じ大学で日本語を専攻している2年生、3年生の19歳から21歳の男女である。そのうち、上級者は15名（3年生）、中級者は15名（2年生）である。この調査協力者は調査1とは異なる⁴。

4.3 調査文の作成と調査方法

王（投稿中）では、「きっと」の類義語である「必ず」にも「この仕事、必ず最後までやり遂げて見せるぞ！」のような「意志」用法と「出かけるときは必ず火の元を確認してください。」のような「依頼」用法があることを見たが、「きっと」と「必ず」には、次のような意味・用法上の使い分けがある。「意志」用法に関しては、「きっと」は「自分にかかわる事柄が成立することへの話し手の確信」を表し、「必ず」は「自分にかかわる事柄を確実に実現させることへの話し手の強い責任感」を表す（詳しくは王（2005、投稿中）を参照）。「依頼」用法に関しては、田（1998）によれば、『必ず』には、当然そうすべきだというニュアンスがあり、相手がそうする義務を負っていることをにおわすが、『きっと』は、間違いなく・忘れずに・約束してね・そうしてくれると信じていますという、お願いの気持ちや、相手に対する信頼がこめられている。」という。

本調査では、このような「きっと」の「意志」「依頼」用法に従う調査文を適切文、これらに反する調査文を不適切文と考え、「きっと」の「意志」用法の適切文3項目と不適切文2項目からなる計5項目の調査文(表2)と、「きっと」の「依頼」用法の適切文1項目と不適切文4項目からなる計5項目の調査文(表3)とを作成した(表2・表3では不適切文に「#」を付けた)。このうち、表2の「#」がついている調査文では話し手の強い責任や義務を含意するため、「きっと」を用いることができない。また、表3の「#」がついている調査文では「そうすべきだ」という話し手の強い要求を意図するため、「きっと」を用いることができない。全ての不適切文では「きっと」の代わりに「必ず」を用いると適切文になる。表2と表3の「#」がついていない調査文はそれぞれ「自分にかかわる事柄が成立することへの話し手の確信」と「お願いするという話し手の期待」を表すため、「きっと」を用いることができる。この調査では、これらの調査文を容認するか否かを○×で判定するように調査協力者に求めた。

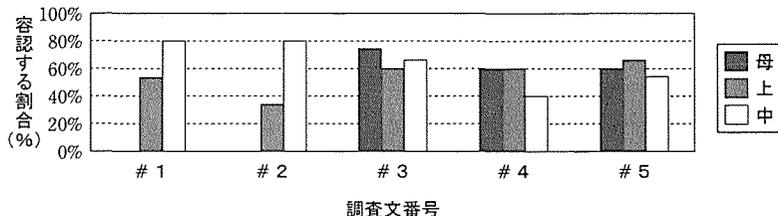
4. 4 結果と考察

表2と表3はそれぞれ「意志」用法と「依頼」用法に関する調査の結果を示したものである。また図2、図3は表2、表3をグラフに表したものである。なお、 χ^2 検定は母語話者と中級学習者、または上級学習者との判定の偏りについて見たものである。

[表2:「意志」用法に関する調査結果⁵⁾ ()内は %

調査文	適切と判断した母語話者の人数	適切と判断した上級学習者の人数	χ^2 の値	適切と判断した中級学習者の人数	χ^2 の値
# 1 A:そのミーティングなんですけど、出席しますか。B:はい、きっと出席します。	0 (0)	8 (53)	10.9**	12 (80)	20.0**
# 2 今年の夏こそきっと旅行に行きたいです。	0 (0)	5 (33)	6.0*	12 (80)	20.0**
3 いつも私のことをバカにしている彼をきっといつか見返して見せます。	11 (73)	9 (60)	n.s.	10 (67)	n.s.
4 この前の試合では負けちゃったけど、今度こそきっと勝つからね。	9 (60)	9 (60)	n.s.	6 (40)	n.s.
5 医者のを私を信じて。いくら難病でもきっと助けて見せるから。	9 (60)	10 (67)	n.s.	8 (53)	n.s.

(**p<.01, *<.05)

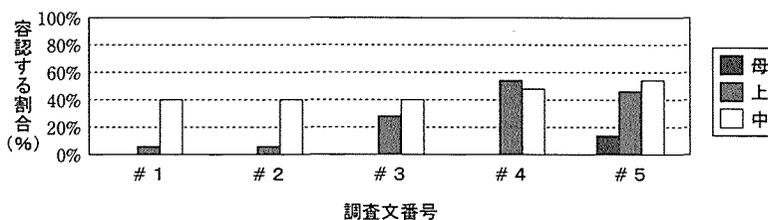


[図2:「意志」用法に関する調査結果]

[表3:「依頼」用法に関する調査結果] ()内は%

調査文	適切と判断した母語話者の人数	適切と判断した上級学習者の人数	χ^2 の値	適切と判断した中級学習者の人数	χ^2 の値
# 1 明日とても大切な会議があるので、きつと10時までに来てください。	0 (0)	1 (7)	n.s.	6 (40)	7.5**
# 2 使用后きつと返すこと。	0 (0)	1 (7)	n.s.	6 (40)	7.5**
# 3 会社を休む時はきつと連絡するようにしてください。	0 (0)	4 (27)	4.6*	6 (40)	7.5**
# 4 今日娘の誕生日だから、きつと早く帰ってきてね。	0 (0)	8 (53)	10.9**	7 (47)	9.1**
# 5 五時に映画館の前で待っているからね。きつと来てね。	2 (13) ⁶	7 (47)	4.0*	8 (53)	10.2**

(**p<.01, *<.05)



[図3:「依頼」用法に関する調査結果]

「意志」用法に関する調査文を適切文とするか非適切文とするかについて、母語話者と学習者の判定の偏りを見たところ(表2, 図2), χ^2 検定の結果, 「きつと」を用いることができる調査文3, 4, 5 (χ^2 検定 n.s.)には有意な差が見られなかった。学習者は「きつと」を用いることができない調査文1, 2を適切文と判定し(特に, 中級学習者と母語話者の差は1%水準で有意), 学習者の「きつと」の容認範囲は広いことがわかる。

また, 「依頼」用法に関する調査文を適切文とするか非適切文とするかの母語話者と学習者の判定の偏りを見たところ(表3, 図3), χ^2 検定の結果, 上級者の調査文1, 2の2項目(χ^2 検定 n.s.)を除いたすべての項目で有意な差が見られた。さらに, 中級学習者のすべての結果は母語話者と1%水準で有意な差が見られた。

表2, 表3の母語話者が不適切と判断した項目を, 中級学習者はすべて適切と判断した。これは, 学習者は「きつと」という言葉と, その用法に「意志」「依頼」用法があることを知っていても, 「きつと」と「必ず」の意味の境界が不安定であることを示している。さらに, 教科書や辞典での「必ず」が「きつと」と同様に中国語の「一定」と訳されていることが多いことなどを考えると, 学習者は「きつと」=「一定」=「必ず」と捉えている可能性がある。このように, 学習者は「きつと」も「必ず」も「一定」と理解してしまうため, 「きつと」と「必ず」の使い分けが難しくなっていると考えられる。結果として「意

志」「依頼」用法の過剰般化を起こしてしまうことになる。これは、学習者が「きっと」の典型的用法に関する理解の形成に母語を介在させた結果であることを示唆している。

しかし、表2と表3を項目ごとに見ると、同じ「意志」や「依頼」の用法でも、「意志」用法の調査文1, 2や「依頼」用法の調査文1, 2のように学習が進むにつれて母語話者に近づいている項目もある一方、「依頼」用法の調査文3, 4, 5のように学習者レベルによる差の小さい項目もあることがわかる。このことから学習者の「きっと」の「意志」「依頼」用法に対する理解は上級レベルでも不完全であると言える。今後さらに「きっと」と「必ず」の関係を追究する必要があるだろう。

5. 調査3：中国人日本語学習者における「きっと」の典型的用法に関する理解形成には母語の転移があるか

5.1 調査目的と調査対象者

調査3では、中国人日本語学習者が「きっと」を習得する際、母語の転移があるかについてもう一度詳しく調べてみる。調査対象者は調査2と同一である。

5.2 調査文の作成と調査方法

王(2004)では、「きっと」の「意志」用法は現在肯定形を表す第一人称の文脈にのみ用いることができ、「否定」「過去」「二人称」「三人称」を表す文脈には用いることができないのに対し、中国語の「一定」は使用範囲が広く、人称、時制、述語のタイプなどには制約がないことを示した。これに従い、この制約に関する理解を調べるため、「否定」「過去」「二人称」「三人称」の文における「意志」用法の調査文4項目と「否定」的な「依頼」用法の調査文1項目の計5項目で調査文を作成した。これらの調査文はすべて「きっと」を用いることができないが、中国語に訳した時、それぞれ「昨天我一定要去动物园，可是他不陪我一起去。」「如果你一定要看那本书，我可以给你去借。」「我一定不去，你再说也没用。」「他一定不唱，就不要勉强了。」「一按这个按钮所有的机器就会停了。一定不要碰。」のようになり、すべて「一定」を用いることができるものである。これらの調査文を容認するか否かを○×で判定するように調査協力者に求めた。

5.3 結果と考察

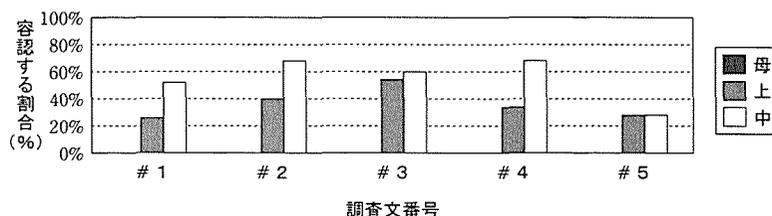
表4と図4は母語の転移があるかに関する調査結果である。

調査3では母語話者はすべての項目を非適切文と判定したにもかかわらず、学習者はほとんどの項目において容認度が高かった。母語話者と学習者の判定の偏りを見たところ、 χ^2 検定の結果、すべての項目において有意な差が見られた。これらの項目は日本語では「きっと」を用いることができないが、中国語に訳すとすべて「一定」を用いることができる。したがって、学習者は中国語の「一定」を頭に浮かべて、これらの項目を容認して

[表4：母語の転移があるかに関する調査結果] ()内は%

調査文	適切と判断した母語話者の人数	適切と判断した上級学習者の人数	χ^2 の値	適切と判断した中級学習者の人数	χ^2 の値
# 1 昨日私はきっと動物園に行きたかったが、彼は一緒に行ってくれなかったです。	0 (0)	4 (27)	4.6*	8 (53)	10.9**
# 2 君がもしきっとその本が読みたいのなら、借りてきてあげよう。	0 (0)	6 (40)	7.5**	10 (67)	15.0**
# 3 私はきっと行かない。君がこれ以上言っても無理だ。	0 (0)	8 (53)	10.9**	9 (60)	12.9**
# 4 彼がきっと歌おうとしなかったら、無理やりさせないでよ。	0 (0)	5 (33)	6.0*	10 (67)	15.0**
# 5 このボタンを押すと、機械が全部とまります。きっと触らないでください。	0 (0)	4 (27)	4.6*	4 (27)	4.6*

(**p<.01, *<.05)



[図4：母語の転移があるかに関する調査結果]

いるだろう。このことから、学習者は「きっと」に「意志」「依頼」用法があることについては知っているが、中国語の「一定」の転移を受け、使用の明確な基準が習得されていないということが考えられる。母語話者の場合は日常生活の中で自然に語感を身につけていくが、中国にいる学習者の場合、自然な日本語と接する機会が少なく、これらの用法の習得を促すには、自然な会話などによって具体的な場面を提示しながら説明するような、何らかの指導が必要であると思われる。

6. まとめと今後の課題

本稿では、中国人日本語学習者における「きっと」の典型的用法に関する理解形成について分析した。その結果、中国人の学習者の「きっと」の習得は学習の進展に伴って進んでいくにもかかわらず、日本語母語話者にとっては「推量」が「きっと」の典型的用法であるのに対し、多くの中国人日本語学習者にとっては「意志」が「きっと」の典型的用法とみなされていることがうかがわれた。また、学習者に「きっと」の「意志」「依頼」用法の適用範囲に関する知識が不足、あるいは類義語との意味の境界が不安定であることが観察された。さらに、「きっと」の用法の理解には、教科書や辞典の記述の影響が関与する可能性があることと、母語中国語の「一定」からの転移があることが推察された。

「きっと」は初級段階で導入される副詞であるが、学習者はまだ日本語に対する語感がそれほど発達していないため、日本語を学習する際、母語の翻訳で学習していると予想される。しかし、学習者は日本語の「きっと」と母語中国語の「一定」のズレを無視しており、「きっと」の意味を正しく捉えることが難しくなっている。その場合に誤った理解を生じさせる可能性があると考えられる。さらに、時間が経つと、誤った理解がそのまま定着して、学習者独自の日本語を形成してしまうことが考えられる。したがって、日本語母語話者が無意識に使っている言語ルールを、できるだけわかりやすく一般化して学習者に示す必要がある。

まず、調査1の結果からは学習者の「きっと」の典型的用法は母語話者と異なっていることが示されたため、「きっと」の典型的用法は「推量」用法であることを学習者に提示したほうが良いと言える。そして、母語話者がもっている「きっと」の語感を学習者に説明するため、文脈上の用例の意味を教えるだけでなく、その根拠として「きっと」の「推量」用法が典型的な使い方であることを学習者に明示したほうがより効果的ではないかと考えられる。

しかし、調査2と調査3の結果から示唆されたように、これだけでは不十分である。つまり、学習者は典型的用法の習得に成功したとしても、その類義語との使い分けが困難であったり、そこに母語の転移が起こったりする可能性がある。よって、「きっと」の典型的用法を学習者に提示した上で、その類義語との意味的境界に関する知識を明示的に提供し、実例を示して中国語の「一定」と比較しながら指導したほうがより実用的かつ効率的であるのではないかと考えられる。

本稿は中国人学習者が「きっと」を中国語の「一定」と結びつけて理解しているという可能性に注目したが、他の可能性、例えば、教師の指導の影響などについては吟味を行わなかった。また、日本語の「きっと」と「必ず」との関係、また、これらと中国語の「一定」との対照についての研究もまだ不十分であると考えられる。そのため、今後の課題として、日本語教育における「きっと」の指導の実態を調査し、日本語の「きっと」「必ず」及び中国語の「一定」のこれら三つの言葉の関係をより一層明らかにした上で、学習者の「きっと」に対するより効果的な指導方法を模索していきたい。

注

- 1 本稿の調査1の日本語母語話者と中国人日本語学習者の「きっと」の産出文にも「確率」用法は現れなかった。
- 2 王(2005)では「きっと」の「推量」用法、「意志」用法、「依頼」用法をそれぞれ「事柄が成立することへの話し手の強い確信」「事柄を成立させることへの話し手の強い意志」「事柄が成立することへの話し手の強い期待」と定義した。
- 3 王(2004)では、「推量」用法は話し手の意志にかかわらない用法であり、「意志」用

法と「依頼」用法は話し手の意志にかかわる用法であると考え、中国語の「一定」を大きく「推量」用法と「意志」用法に分けた。そのため、王（2004）での「意志」用法は「依頼」用法も含んでいる。

- 4 本調査の調査時期は調査先の大学の期末テストと重なり、調査協力者を集めるのが困難であった。また、調査協力者の負担を減らすため、調査2, 3は調査1とは異なる15人の学習者で行った。しかし、いずれも大学、学年、専攻に関しては同じである。また、調査結果の統計学的分析からは、学習者と母語話者の間には明らかな有意差も見られた。これらのことから、サンプルとしては問題がないものとする。また、調査2, 3では、中国人日本語学習者と人数を揃えるため、日本語母語話者も15人に絞った。
- 5 表2, 3, 4の「**p < .01, * < .05」は、それぞれ χ^2 検定の結果で母語話者と学習者の判定の偏りが1%水準または5%水準で有意な差があることを表す。「n.s.」は、 χ^2 検定の結果では母語話者と学習者の判定の偏りには有意差が見られなかったことを表す。
- 6 「五時に映画館の前で待っているからね。きっと来てね。」という文に関して、母語話者15人中13人が不適切と判断していた。これはこの文を「お願い、来てね、という話し手の期待」ではなく、「来るべきだという話し手の要求」として読み取ったためであると考えられる。本調査では、本文中に述べた理由からこの文を適切文として扱った。

参考文献

- 石神照雄（1987）「陳述副詞の修飾」寺村秀夫・鈴木泰・野田尚史・矢澤真人（編）『ケーススタディ日本文法』96-101, おうふう。
- 市川保子（2000）『続・日本語誤用例文小辞典—接続詞・副詞—』凡人社。
- 兪曉明（1999）『現代日本語副詞研究』大連理工大学出版社。
- 王冲（2004）「日本語陳述副詞「きっと」と中国語語気副詞“一定”との対照研究—日本語教育における陳述副詞「きっと」の指導のために—」『お茶の水女子大学大学院人間文化研究科人間文化論叢』7, 325-334.
- 王冲（2005）「陳述副詞「きっと」の意味構造と日本語教育への応用可能性—認知言語学観点から—」『日本認知言語学会予稿集』6, 179-182.
- 王冲（投稿中）「「必ず」の意味構造—母語話者と中国人学習者の使用傾向の違いから考える—」
- 大関真理（1993）「日本語教育の視点からみた副詞」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊創刊号, 1-14.
- 河上誓作（1996）『認知言語学の基礎』研究社出版。

- 北條淳子 (1982) 「日本語学習の中級段階における副詞の問題」『木村宗男先生記念論文集』
165-181, 早稲田大学語学教育研究所.
- 工藤浩 (1982) 「叙法副詞の意味と機能—その記述方法をもとめて—」『国立国語研究所報
告 71 研究報告集』3, 45-92, 秀英出版.
- 小林典子 (1992) 「「必ず・確かに・確か・きっと・ぜひ」の意味分析」『筑波大学留学生
センター日本語教育論集』7, 1-17.
- 菅谷奈津恵 (2004) 「プロトタイプ理論と第二言語としての日本語の習得」『第二言語とし
ての日本語の習得研究』7, 121-140.
- 田忠魁・泉原省二・金相順 (1998) 『類義語使い分け辞典』 研究社出版.
- 松本曜 (2003) 『認知意味論 シリーズ認知言語学入門 (第3巻)』 大修館書店.
- 森本順子 (1994) 『話し手の主観を表す副詞について』 くろしお出版.

参照した教科書と辞書

- 『新編日語』(1994) 上海外国語大学編 上海外語教育出版社.
- 『新日漢辞典』(1995) 大連外国語学院『新日漢辞典』編写組編 遼寧人民出版社.
- 『新明解国語辞典』(2004) 三省堂.